

【外題】

里見八犬傳 第三輯 卷五

【本文】

南總里見八犬傳第三輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第廿九回、雙玉を相換て額藏類を識る  
両敵に相遇て義奴怨を報ふ

濱路は事の趣を、聞くに歎きは十寸鏡、影を得認め家父家母の、なき名告たる兄道節が、いと  
も切なる言の葉に、露の玉の緒引とめられて、霎時苦痛を忘るゝまでに、情願はひとつ稱へども、  
又想像る良人の事、わが宿業のすゑに、かゝる非命は実の母の、造りし罪よ報ひ來て、妹伏の契  
り浅茅生の、小野に屍を曝すらん。されば因果の理りに、悟の窓を開けども、なほうち曇る胸の月、  
現煩惱の山の挾に、碎けて落る涙の瀧の、ちすぢの兄と今さらに、面あはするも恥しく、又浅まし  
く哀しさに、いよく弱る命根の、今を限りとおもふにぞ、いかで一ト言遣さんとやうやくに頭を  
擡て、いと苦しげに息を吹き、「原來おん身はわらはが家兄歟。仇さへ撃て給はりし、思ひかけなき  
介抱は、あふを別れの今般の對面、現はづかはしき限りに侍り。いと慕しく年月を、ふる郷の事今  
さらに、聞くに哀しき家尊の陣歿。なき名をしるはせめてもの、心やりに侍るなる。産の恩の弥高  
き、実の親をしらで過ぎば、人と生れし甲斐あらじ、と思へば悲しくなつかしく、神に佛に手をあ  
はせ、祈盡して物体なくも、恨みし事の侍りしに、絶なんとする息の内に、その願事の稱ひしは、  
神の冥助歟、佛の慈悲歟。歡しさに就て亦、哀しみもますわが身の業因、母はと問へば家兄の為  
に、母御の讐たるこよなき罪科、家尊の怒にわらはさへ、棄させ給ふはおほけなき、慈悲とはしらで  
外にだも、訪せ給はぬ親胞兄弟を、心つよしと恨みてし、迷ひは晴て又曇る、涙の雨に糞虫の、父  
とは鳴けど鬼の子の、母に等しき死後の恥、世に在る程は養親達の、貪欲邪慳に身をおきかねて、  
いくそばくその心を苦しめ、偶結びし妹と伏の、縁し果敢なく中絶て、仇なる人に伴れ、俱に  
この野の土とならば、情死とや世に謡れん。冥土の障りはこれのみならで、心もとなき事侍り。わ  
らはが丈夫は故管領、持氏朝臣譜代の近臣、大塚匠作ぬしには孫、犬塚番作一成大人の一子に、  
犬塚信乃成孝となん呼れたる、弱冠に侍るかし。わらはが養母の甥なれども、その心ざまいと正し  
く、文学武藝に暗からず、由緒ある武士に侍れども、はやく孤となりしかば、伯母夫許身を寓せ  
て、所領の田園を横領せられ、いと窶々しく侍る物から、時運に任して人を怨ず。家に傳る名刀あ

り。そはその村雨丸に侍り。親の遺訓に年來の宿願を稍果さんとて、件の宝刀を携て、許我殿へ参らんとせし前の夜に、伯母御夫婦の腹きたなく、この左母二郎を相譚つ、神宮の漁獵に假托て、宝刀を損替奪はせたるに、左母二郎も亦奸智をもて、横取して腰に帶たり。さりともしらでわが良人は、許我へ参らばなかくに、鹿忽をいひときかたかるべし。いかで宝刀をとり復さん、と思ふに甲斐なき必死の深痕、かへらぬ水のあはれよに、きえてゆく身は惜からで、惜むは良人の名に侍り。願ふはおん身の資のみ。こゝより直に許我へ赴き、そが安否を問ひ定めて、宝刀を遞与給はらば、こよなき恩義に侍るめり。産の母の故を思へば、家兄なりとてかゝる事、いといひかたく侍れども、外によるべはなき後までの、心かゝりを果させたまへ。大慈大悲の恩徳ならん。只願しきはこの事のみ、聽容てたべ、家兄の君」と頼む言葉に声枯れて、霜宵の虫と細りつゝ、物いふ毎に漬る、血しほにすべはなかりけり。

道節聞て嘆息し、「母と母との故をもて、われしうねくも女弟を忌んや。夫をおもふ今般の願言、推辭べきにあらねども、そは家事にして私也。君父の讐を後にして、私事を先にはしかたし。われは月ごろ君父の讐、扇谷定正に、忻よつて一ト刀に、怨を復さんと思ふ物から、その便りを得ざりしに、不思議に手に入るこの名刀。これをもて讐に近づき、宿望遂て餘命あらば、その時にこそそなたの夫、犬塚信乃とやらんが安否を問ひ、恙もなく環會は、村雨丸を返すべけれ。こは憑れぬ事にしあれば、定かにはうけ引かたし。われもし讐の手に死なば、この大刀も亦分捕せられん。君父の為にはこの身を忘る、豈妹夫の事をおもはんや。貞操節義は、婦人の道也。忠信孝義は、男子の道也。勇士の卒意かくの如し」と理り迫て諭すになん、濱路は望を失ひて、しからば何とまうす共、讐を討ての後ならでは、うけ引かたし、と心つよき、回答に忽地胃塞りて、一ト声苦と叫びつゝ、そがまゝ息は絶てけり。

道節讐をしばたゝき、「儔稀なる女弟が節操、今般に遺せし一ト條を、肯ざるも武士の意地。せめてはこゝに亡骸を、斂めて冥府の苦惱を救ん。さは」とてやをら抱き揚て、火定の坑へ推おろし、残れる柴を投入るれば、夜風のまにゝ埋火の、再び燃て煽々たる、茶毘の煙は鳥部野の、夕もかくやと想像る、歎きははじめにいやまして、霎時護りて合掌し、「泡影無常、弥陀方便、一念唱名、頓生菩提、弥陀佛々々」と廻向しつ、悵然として身を起し、彷徨として立も得去らず。又数回嘆息し、「大約法師の終を執るに、柴薪を積てみづから焚を、火定となん唱たる。わが朝には信濃なる、戸隠山の長明法師が、鳥部野に火定せし事、又紀國那智山の應照も、終を火定に執りし事、『元亨釋書』第十二卷、忍行篇に載たるなめり。われは大義を舒ん為に、漫に愚民を欺きし、火定の因果眼前、

妹が身を焚く茶毘とはなれり。われ亦いづれの郷に死し、いづれの野にか骨を埋ん。定めなき世のたゝずまひ、後るゝも先たつも、北邱山頭一片の、煙とおもへばいと果敢なし」とひとりごちつゝ、天うち仰ぎ、「詮なき歎きに夜は深たり。とくこの山を踰ん」とて、彼名刀を腰に跨、立去らんとする程に、後方に窺ふ額藏は、濱路道節が問答を、おちもなく竊聞つ、貞操義烈に感佩して、嘆息の外なかりしか、われ窓に彼処に到らば、節婦の臨終を慰る、よすがとはなるべけれど、そが兄われを訝りて、物かたりの腰を折らん。躲れて聞くにます事なし、と思ひにければ、端なく出ず。復つくく〜と聞く程に、村雨の一ト刀は、左母二郎が横畧せしを、道節が手に落たれば、洒件の大刀をもて、響に近づく便著にせんとて、濱路が遺言をうけ引ざる、事の趣に膽潰れて、肚裏におもふやう、「定正ぬしは大敵也。道節死力を竭すとも、怨を報んこと輒からず。渠撃れなば大刀も喪ん。縦彼人響を撃て、前諾に負くことなく、犬塚生に彼宝刀を、返す日のありといふとも、火急の難義を救ふに足らず。輒の鮎に水をは飼はで、日を歴て枯魚を市に訪ふとも、亦何の益やはある。さるにても、犬塚生の、安否いとく〜心もとなし。名告て由を告るとも、明々地に大刀を乞とも、渠その妹にすら許さねば、いかにぞわれに通与んや。組伏てとり復ん」と思ひ決めつ、腕を

【挿絵】「沾かな筆におさめて露の玉 玄同「玄同」著作堂」「額藏」「道松」

扼りて、瞬もせず闕窺をれば、彼はや濱路を火葬して、村雨の大刀を腰に挿副、立去んとしたりしかば、「癖者等」と呼とめつゝ、樹蔭を閃りと走り出て、刀の端を丁と捉り、両三步戻せば、驚きながら振かへりて、端かへしに拂ひ除、大刀を抜んとする処を、横ぎまに引組たる、技も力も劣らず優ず、勇者と勇者の相撲には、寸分の隙あらずして、迭に捉たる手を放さず、曳々声をふり立て、ちから足を踏鳴し、沙石を飛ばし、小草を蹴ひらき、両虎の山に戦ふ如く、鷲鳥の肉を争ふに似て、いつ果べくもあらざりしか、いかにかしけん額藏は、年來膚を放さざる、護身囊の長紐紊れて、道節が大刀の緒に、いく重ともなく贅縁つゝ、挑むまに〜引断離られて、囊は彼が腰に著たり。そを取らんとする程に、思はずも手や緩みけん、道節忽地振ほどきて、大刀を引抜き、撃んとすれば、こゝろ得たり、と抜合せて、丁々發矢、と戦ふ大刀音、電光石火と晃めかす、一上二下、手煉の刀尖、沈で拂へば、跳躑、引ば著入り、進めばひらく、樊噲が鴻門を破るとき、関羽が五関を越るの日、孰が劣り、孰が勝ん。天には限なき月の照り、地に亦茶毘の光あり、真夜中ながら明ければ、なほ相挑て迷はず去らず。道節悍て撃大刀を、額藏左に受流せば、刀尖あまりて腕より、流るゝ鮮血を物ともせず、丁と返せし大刀風尖く、道節が身鎖の懸鬚、刀尖ふかく裏徹て、肩なる癩を砍傷れば、黒血さつと瀆り、瘤の中に物ありけん、蝨の如く飛散て、額藏が胸前へ、礮と當るを、

落しも遣らず、左手に楚と握出で、右手に刃を閃し、又透間もなく切結ぶ。大刀すぢ侮りかたければ、道節は受とゞめ、又受ながして声をふり立、「やよ等一等、いふ事あり。汝が武藝甚佳。われ復讐の大望あり、豈小敵と死を決せんや。且く退け」といはせもあへず、額藏眼を瞪して、「さはわが卒事をしりたるな。命惜くは村雨の宝刀を通与して疾々去れ。かくいふわれを誰とかする。犬塚信乃が無二の死友、犬川莊助義任也。

汝が名は聞つ犬山道松、烏髪入道、道節忠與、宝刀を返せ」と敦圀は、道節呵々と冷笑ひ、「わが大望を遂るまでは、女弟にすら、うけ引ざる、大刀を汝に與んや」「否とらでやは、とくく通与せ」と再び詰よせ、附廻して、跳蕩て丁と撃を、左邊に拂ひ、右邊に挂る、道節は透を揃りて、火坑の中へ飛入りつ、發と立たる煙とゝもに、往方はしらずなりにけり。

額藏吐嗟と追かねて、俯て見つ、又仰て瞻つ。「原來火遁の術をもて、逃去し坎、残念也。さるにても道節が、瘡口より飛出で、わが手に入りしは何なるらん。いと不審」と燃残る、火光によせて熟視るに、「呬不思議や、犬塚信乃と、わが秘藏せし、孝義一双の玉に等しく、光も形も寸分違はで、この玉には忠の一字あり。こは怎生怪し」と驚くまでに、又と見、かう見つ、沈吟じ、忽地睨て莞尔と笑み、「此彼思ひあはすれば、彼犬山道節も、終にはわが同盟の人となるべき因縁あらん。さるにてもわが玉を、秘おきたりし護身囊は、彼が腰刀にからみ取られつ、そが肉身より出たる玉は、思はずわが手に入りし事、奇異とやいはん、微妙とやせん、怪しといふもあまりあり。これによりて推ときは、わが玉も彼宝刀も、後には復る時あらん。そはとまれかくもあれ、犬塚生が許我の首尾、心もとなき限りなれども、これらの因縁あらんには、彼処にも神の冥助あるべし。いかばかりに思ふとも、こゝより許我へは十六里、今東間に告るによしなし。はやく犬塚へ立かへりて、復せんすべもあらんかし。豫ては假傷を造らん、と思ふ折から幽揚傷肩たり。これも物怪の幸ひなる坎」と自問、みづから答て、手拭をもて瘻を包み、又愀然と火坑を見かへり、「さるにても濱路との、丈夫も及ざる心烈節義、いと痛ましくも感ふかゝり。日ごろはわが腹心を、しらすることのなかりしかど、死しては必、灵あらん。犬塚生に再會せば、おん身が最期の心烈を、巨細に告て後の世に、夫婦一蓮托生の、契を固うすべき也。わが一ト言の手向を受けて、解脱の室に赴き給へ。南無阿弥陀佛」と念しつゝ、退かんとする程に、左母二郎が亡骸に、撲地と跌き、透し見て、ひとり心にうち点頭、刃を抜て、首搔落し、傍の椶に伐掛て、その幹を推削り、墨斗の毫を拔出して、遽しく墨を染、

是は悪黨網乾左母二郎也。或秘藏の大刀を掠て、又處女濱路を拐撃し、その従ざるを怒りて、こ

ゝに烈女を殘賊せる、天罰仍件の如し。年月日時。

と書つけて、そがまゝ墨斗を腰に納め、「斯書遺せば、錯傳へて、此彼情死とするものなからん。是も節婦へ追薦のみ」とひとりごちつゝ歩をはやめて、礪川へと横ぎり下れば、駒込寺の鐘の聲、數は九ツ、九品の淨利、佛に媚ざる壮士も、輪廻応報眼前、見つゝ聞つゝ極樂水の、西へと進む野に山に、其処も紅蓮の浪切暇、大塚村へいそぎける。

案下某生再説、墓六亀篠は、濱路左母二郎等を追苗よとて、人遣りなく遣しつ。そが折もよく詣來つる、土太郎さへに駈立て、件の男女を追せなければ、十に八九は將て來つべし。今かく、と立て見つ、居て見つ俟ども音もせず。夫婦が曾は荒磯の波の、隙なき如くうち騒ぎ、こゝろもこゝにあらしの風、挿頭の花を取られたる、後悔其処に立ずして、絶は空しき夏坐舖に、片流れする蠟燭の涙を見ても形なく、夫婦は泣も合されず、今宵ばかりは一時が、千年になれ、と祈るのみ。外面過る人音に、或は濱路を將て來つる坎、と虚頼して出て見つ、或は簸上が來つる坎、と闕窺あへず膽を冷せど、庖厨なる羹は、水になるにもこゝろえつかず、炙肉はいたつらに、半骸炭になりたるをも見かへらず、心こゝに在ざれば、食ざれども、餌をおぼえず。手の舞、足の踏ところを知らざれば、麻衣の裏かへり、袴の後の衤れたるを忘れたり。

とかくする程に、十九日の月高く昇て、今はや亥中になりしかば、陣代簸上宮六は、媒灼軍木五倍二と連拉て、墓六許詣來にけり。各麻の上下なる、礼服を著たれども、潜びやかなる摺入なれば、従者をいと糞して、一個の奴隷に、挑燈を引提させて先に立せ、若黨兩人、鞋奴兩人を従へつゝ、且呼門せたりければ、あるじ夫婦は今さらに、周章てせんすべをしらず。亀篠は、勸盃の塩梅心もとなしとて、いそしく庖福に起きて、彼此に忙然たる、婢女們を呼立て、俄頃火を焚せ、炭を起させなどしたる、紛冗更にいふべからず。そが程に墓六は、応々と答ながら、書院の蠟燭を継かえて、帚とる手も戦たる、そこら一遍掃出して、玄関なる式臺へ、投るが如く出迎、「思ふにまして速なる來臨、いと辱くこそ候へ。誘給へ」と先にたちて、引て書院に赴けば、宮六五倍二は、會釋して、賓主の席定りつ、送に寿の辞を述、暑中の恙なきを祝して、挨拶既に訖れども、茶を勧るものもなし。うち目戌てをる程に、墓六は掌鳴らして、「とく盃を進らせよ」としばく催促しつれども、応のみして早にはもて來ず、待こと半晌許にして、亀篠は、みづから洲濱の盃臺を捧つゝ、恭しく勸れば、雛婢兩人は、羹の折敷を按排て、銚子を執てをり。當下亀篠は、身をひらかして宮六等に、辱きよしを述る、物のいひざま顔の色さへ、生平にはあらで本木融らず、いと皺びたる満面に、白粉を塗著たる、鼻のあたりに鍋の炭を、したゝかに塗添たり。とはしらず

して唇を圓め、目を細して阿諛の、刃辨も傍痛ければ、宮六五倍二は見ぬ態して、笑を忍べは、墓六も、妻の兒を見かへりて、あな浅まし、と思ふのみ、白地にはさしもいはれず、立ねく、と促せ共、龜篠は耳にもかけず、真顔になりて啗りけり。

かくて賓主の口誼訖て、おのゝ碗の蓋を取れば、羹は味噌汁也。肉は鯨の筒切に、新牛房を瑣細したる、田舎料理も三齋七醢、時に取ては、いと愛たし、と箸を揚たる宮六に、些後れて五倍二は、汁を吸ひ、肉を夾めば、あな無慚や、鯨にはあらずして、いと黒やかに灰染たる、束藁子をひとつ盛られたり。是はいかに、と箸にかけて、折敷の傍に引出せば、墓六龜篠驚駭きて、「そは物体なし。物どもが、龜忽にも限りあり。言語同断、許させ給へ」と勸解つゝ、折敷を引かえて、束藁子をはやくとり隠し、只管咎を庖丁に、戻せて羞を暗れども、羹は龜篠が、手つから盛しものなれば、さりとして人を叱りも得ならず、一座忽地しらけたり。かくて又、盃を勸たる、賓主の辞讓果しなければ、宮六はやうやくに、その盃を受るになん。龜篠は介添て、雛婢に篩せたる、款待態に宮六は、傾んとして半も得喫ず、啜啜り、又伏沈み、拿たる盃を擲て、咳くこと甚しく、いと苦しげに見えしかば、こはそもいかに、と龜篠は、後方にゐよりて背を捺り、墓六は湯を勸めて、五倍二共侶介抱に、宮六涙を推拭ひ、「式歌故実かしらねども、われに熱醋を飲せたる、情なし」と怨ずれば、墓六龜篠おそれ惑ひて、銚子を引よせつゝ、その香を鼻に、果して醋なり。

再三の龜忽に愧て、婢女們を罵れども、これも亦龜篠が、手つから篩たるものなれば、人を咎るよしもなく、夫婦は冷き汗を流す、額を席薦に掘埋めて、辞斉しく勸解しかば、五倍二さへに智くるしさに、執なすこと大かたならず。「更闌ての酒宴なれば、臺所はいとゞしく、混雑の失錯あらん。新人の病著おこたりて、彼うへに障りなくは、それにます饗応なし。再度の龜忽は酒と醋と、等類にして色も似たり。わが束藁子にはますべけれ。寛仁大度の簸上大人、かばかりの事何かあらん。この盃は一巡にして、婚姻の席に更め、しかるべし」と提撕ば、宮六は稍憤り解て、又盃をとり揚たり。あるじ夫婦は歡びて、銚子を引かえさせ、更に種々の酒般を添て、盃を勸る程に、夏の夜なれば短くて、はや子の時になりけり。しかはあれども濱路を出さず。

五倍二頻に焦燥て、しばく催促してければ、夫婦はますく困じ果て、軍木を傍に請招き、墓六まづいひけるやう、「婚姻の事は今とても、仔細なく候へども、濱路は甲夜より痞發りて、いかにともせんすべなし。僮僕們を走らして、只管醫師を請來せども、小夜の事なれば、醫師はさら也、人橋かけたる僮僕們さへ、一人ンも帰り來ず、心苦しうこそ候へ。さばれ痞の事にしあれば、いく日もあらで瘡るべし。今雲時待せ給へ」と真しやかに耳語ども、五倍二一切うけ引ず、「それは亦謂

なし。新人に病著ある事は、豫て兼知の婚姻を、今さら翌まで待よしあらんや。いはるゝ趣、偽りなくは、新人の臥房へ案内し給へ。その容体を一診せん。あな馬鹿々々し」と敦圀たる、声おのづから高ければ、亀篠は傍痛くて、俱に胃をぞ苦しめたる。當座脱も術彈で、夫の袂を引動し、「今は隠すによしもあらず。明々に告たまへ。さして勸解るにますことあらじ」といはれて臺六嗟嘆しつ、腋下なる冷汗を、推拊て容を更め、「軍木大人願くは、舊の席に著給へ。おん疑ひを釋まうさん」といふに五倍二いとゞしく、心もとなく思ふ物から、請るゝ隨に復りをり。

當下臺六は、身を轉して再拜し、「賢公両所上に在せり。なでふ欺き奉らんや。濱路は甲夜に逐電せり」と告るを兩人聞あへず、驚き怒て声をふり立、「逐電せしとて事済べきや。そは彼犬塚信乃とやらんに、妻せんとて落し遣りし故。又彼奴が將て走りし故。今速に引戻せ。をらずといふとて、それを聽んや。戻せ、返せ」と膝突進めて、兩人齊一逼立たり。かゝりけれ共、臺六は、却に胃を居て、平伏たる頭を擡、「縁由をも聞果給はで、おん腹立の酷しきは、現さあるべき事ながら、且某がまうすよしを、巨細に聞召れよ。信乃が事は豫てより、告奉りし情由あれば、渠を出し遣らんとて、某夫婦しのびくに、肺肝を摧き、智囊を絞り、熟く謀りて遠離たり。渠いかにして濱路を將て、走ること候べき。只疑しきは近隣なる、浪人網乾左母二郎のみ、思ひあはする事なきにしも候はず。彼奴は俄頃に家材を沽却て、嚮に逐電せしと聞つ。濱路を誘引出せしならん。さればその折、時を移さず、僮僕們を駆立て、追せられどもいまだ返らず。又さるすぢにこゝろを得たる、土田の土太郎といふものを備遣し、間道捷徑漏すことなく、追捕を蒐たる事にしあれば、晝までには將て來つべし。斯まうすに偽あらば、某が白髪頭を、取らせ給ふとも恨みなし。枉て且く俟せ給へ」と亀篠共侶辞を盡して、肝膽を吐き、実を告て、叮嚀に和解れども、宮六五倍二等は、狐疑なほ解けず、俱に怒れる声さま尖く、「そは胡乱也。辨を振ふて、陳ずればとて、聽よしあらんや。左母二が濱路を將て走りし、といふに正しき證據はあらじ。密夫は孰にもあれ、聘礼物を受たる女兒を、走らせたれば、親も同罪、いひ釋ばなほ後暗かり。汝等は初より、贈物を貪りて、熟く吾們を欺きたるな。しからずとやはいはるゝ。熱湯を飲するとは、世話にいへ共、熱醋を喫する饗応ありや。束藁子を齧せても、欸待といふべき故。すべて汝等が寛怠なる、かくの如くに重役を、弄ぶ村長ありや。加 旃前の日には、濱路は風邪に臥たりと偽り、今宵は瘡が發りしといへり。前後四道路の非議乱言、所詮濱路を出さずは、目に物見せん」と左右より、刀の琿窺げて、譴責たる威勢に、臺六も亀篠も、顔色ますます蒼さめて、魂ほとく身に添ず、「仰寔に理り也。寔に然也」と答るのみ、齒戦して止らず。執酌の雛婢等は、おそれて其処に得をらずなりぬ。且く

して臺六は、胸を鎮めて後方なる、脇挿の刀を取て、宮六等がほとりにさし措き、「両君今その疑ひを、釋せ給はんとならば、その刃を御覽せよ。これは是、故管領持氏朝臣より、春王殿へ讓せ給ひし、村雨の一ト刀なり。信乃が父犬塚番作、結城に籠城したるとき、盜取て脱去、最後にその子に與たり。某この事をしる故に、いぬる日云云の術をめぐらし、信乃を神宮に欺引出して、刃を搦替取たる也。豫ては管領家へ獻らん、と思ひにけれど、當坐の質物、濱路がかへり來つるとき、増牽出とも鬮せよ。これぞこの臺六が、誠心なれ」と真たちて、件の刀をさし示せば、宮六些氣色を和げ、「この刃をもて村雨丸、とするには正しき證據ありや」と問ふに臺六微笑て、「陣代いまだ知でやをはする。村雨丸の奇特たる、引抜ときは忽地に、刀尖より水氣霽り、殺氣を含てうち振れば、その水四方へ散乱して、驟雨の降るが如し。某既に試みたり。何の疑ひ候べき」といふに宮六うち領き、「現ざるよしは灰に聞つ。且一見」と取揚れば、龜篠は蠟燭の真摘捨てさし寄する、燭臺を又引よする。五倍二は小膝を進め、「音にのみ聞く名刀を、よき折からに一覽せる、某さへに福ひあり。とくく」と勸れば、宮六やをら引抜きたる、刃を火光にさしよせて、皆もろ共に見をはなさず、檢れ共、水氣は顕れず。是はいかに、とうちかへし、と見かう見ても雫はなし。果はうち腹立て、只管にうち振れば、後方の柱に打當て、刀尖些曲りにけり。五倍二はやくも是を見て、「天晴名劍、水氣はたゞず、火氣を帶たる焼丸ならん」とあざみ笑へば、宮六は、怒れる面色朱を沃ぎて、臺六を佶と睨まへ、「この白物、膽太し。かばかりの鉛刀を、誰か村雨の刀とおもはん。一チ度ならず、二度ならず、われを侮る老耄奴、覺期せよ」と罵れば龜篠遽て声ふり絞り、「いかにばかりに宣ふとも、いぬる夜、水の溢れしを、わらはも側に見つるものを」といはせも果す宮六は、拿たる刃を席薦に突立、向ふさまに推曲れば、鍋蔓の如なりたるを、又引抜て投出し、「汝等かくても争ふ坎」と五倍二も共侶に、酔客の癖なれば、挿ひけらかす腰刀の、反うちかけて詰すれば、吐嗟と騒ぐ龜篠は、腰うち抜してせんすべしらず。臺六は只呆れ果て、勸鮮んとするに辞もなし。原來伎倆の裏をかきて、この贗物を騙せしは、信乃なるべき坎、左母二奴坎。二人に一人は違はじ、と思ふ物から今さらに、人を咎ておのが非を、いひ釋べくもあらざれば、且おそれ且蓋て、忙しく身を起し、逃んとすれば、宮六は、ますく怒る血氣の勇「兪兪等」と呼とめて、抜閃す刃の稲妻、あびせ被たる一ト撃に、臺六は背を砍られて、仰さまに倒るゝを、再び撃ん、と晃かす、刃の下に龜篠は、轉つ軋つ、宮六が、向臚を抱きたる、老女のちからも一生懸命。五倍二うち見て飛蒐り、「妨げすな」と龜篠が、頭髻を左手にからまへて、引放さんとしつれども、放さで人を呼立れば、息の根留ん、と刀を引抜き、肩尖

【挿絵】「隠悪の悪報臺六亀篠横死す」「ひかみ宮六」「ぬる手五ばい二」「ひき六」「かめさゝ」「せ介」四五寸押砍に、ぼらりずんと劈たり。亀篠深痕に、霎時も得堪ず、苦と叫べば、宮六は、後さまに蹴放たる、その間に臺六は、鈍子皿鉢を投げかけつゝ、枉たる刃を踏直し、且く防戦へども、既に痛手を肩たりければ、進退いよく不便也。宮六等はさきこそ、と弱みに祟る鬪撃、夫婦苦痛の声うは枯れて、鮮血の泥に尾を曳く亀篠、四跛ふ臺六逃迷ひ、蛇に追るゝ七轉八倒。さばれ命は惜かるにや、なほ腕れんと悶搔く折、濱路左母二郎等を追かねて、先はや一人かへり来る、背介は背戸より衝と入りて、庖涌を見ても、次の間へ、いゆきても、人一個もをらず。只宮六等が従者四五人、賀酒に酩酊して、従者部屋に熟睡せり。故あるかな婢女們は、太刀音に戦慄て、悉皆逃亡たり。背介はいかでか是をしるべき、主人によしを告んとて、縁頬より進み近づき、書院の障子を引開れば、目前に閃り、とうち被る、五倍二が刃の光に、一ト声阿と叫びもあへず、右の小鬘を砍裂れて、後さまに滾落つゝ、そがまゝ簀子の下に敷かれて、苦痛を忍びて音もせず。

さる程に宮六は、怒に乗して臺六に、數个所の痛手を肩せつゝ、思ひの隨に切なめば、五倍二も亦亀篠が肩を砍り、股を劈き、十二分に苦せて、兩人齊一砍殪し、おのゝ絶命を刺たりける。浩処に額藏は、圓塚より殊さらんに、歩をはやめてかへり來つ。真夜中なるに諸折戸を、いまだ鎖ざる主家の光景、こゝろ得かたし、と進み入る、裏面には絶て人氣なく、書院のかたに倒るゝ物音、嘯く人声してければ、いよゝ驚き怪みつゝ、いそしく草鞋を脱捨て、走りて其処に來て見れば、あるじ夫婦は砍仆され、仇人は日ごろ認りたる、陣代兼上宮六と、属役軍本五倍二也。おのゝ胸に乘し懸りて、刺たる刃を引抜き拭ひ、走り去らんとする程に、額藏吐嗟、と懸塞り、「御両所何処へ逃去給ふぞ。下司なれども主の讐、いかでかは脱すべき」といはせもあへず兩人は、信とにらまへて諸声立、「命をしらぬ愚人かな。陣代に無礼なる、村長誅伐せられしかば、

【挿絵】「帰村の夕はからずして仇を殺す」「亀さゝ」「ひき六」「宮六」「額藏」「五ばい二」

奴婢等は連坐をおそれるべきに、仇人呼り奇怪也。汝も主の相伴させん」と蔑り誇て砍著る、刃を外して打合せ、左右の拳を働して、兩人が利腕を、楚とらへて動せず、と見かう見つゝ冷笑ひ「莊官に越度あらば、問注所でこそ罪を糺さめ。毛檢の折にもあらざるに、各夜中の來臨は、酒喫んとの為なるべし。下郎にも亦五常あり。主を撃せて阿容々々と、讐を目送る法やある。推ならべて雌雄を決せん。かくいふは莊官が庭子に等しき小廝額藏。敵手には足らずとも、立あはれよ」と突放つ。双なき臂力勇悍に、兩人は膽を冷し、捉られし腕は脈絶て、摧るばかりに覺しが「逆るとも脱さじ」と思ひかへして双方より、声をもかけず復打かくる、刃の下を閃りと潜りて、

腰刀を抜合せ、二人を拵て戦ふたり。所要の善悪異なれども、今額藏が拿たる刃は、前の夜に龜篠が、信乃を撃てとて授たる、大塚匠作三成が、數戦を経たる銳刀なり。ぬしは素より稀世の豪傑。自得の武藝、法に稱ひて、秘術を盡す奮撃突戦。いまだ十合に及ずして、逃んとしたる宮六を、脚より九の兪の下まで、幹竹割に砍墮し、返す刀に五倍二が眉間を礮と劈けば、苦と叫て逃走るを、逃さじと追ふ程に、宮六五倍二が従者等は、後の大刀音に驚き覺て、庭門よる走り來つ、と見れば簾上は既に撃れて、軍木は痛手を負つゝも、外面へ逃るとて、巻石に礮と跌き、向ひ遙に轉輾ひて、脱るべくもあらざれば、件の若黨兩人は、已ことを得ず刀を抜連れ、額藏を馳隔たり。そが間に兩三人なる、奴隸は五倍二を肩に引被け、或は手を添え、足を釣り、宿所を投て逃去るにぞ、額藏は怒れる虎の、群たつ羊を馳るごとく、瞬間に彼若黨を、左右へ撞と砍伏せて、再び追んと走出る、衡門の邊にて、濱路左母二郎等を追ひかねて、兪共侶に立かへる、僮僕們に交遭けり。このものどもは額藏が、血刀を引提たる、為体に驚駭きて、矢庭に持たる六尺棒を、横がらみに連して、出しも遣らず推禁め、事の様子を問もあり、或は「刃をうち落して、縛めよ」と罵もありて、只囁々と叫ぶのみ、進むもの一人もなし。額藏は情由も得しらぬ、僮僕們に抑立せられて、只管に焦燥ども、同士撃せんはさすがにて、五倍二を撃漏らしつ。今は追ふにも及びかたし、と思へば血刀を拭ひ納め、且衆人にうち對ひて、あるじ夫婦が横死の事、仇人簾上宮六等を、撃留たるよしを告げて、引て書院に赴けば、衆皆更に驚き呆れて、是非の分別するものなく、只陣代を撃たりし、連坐をおそれて忙然たり。そのとき額藏又いふやう、「われも今宵小夜深で、下総より飯村したれば、事の趣は得しらね共、主人夫婦の撃るゝ折、還りあはせてかくの如し。五倍二脱去たれば、天も明ば城中より、檢察の夥兵來つべし。遅くは問注所へ出訴して、復讐の趣を、詳に述べんのみ。今宵の事は各位の、管ることにあらざかし。好も歹も額藏が一己のうへにあるべければ、必しも狼狽給ふな。婢女們は怕迷ひて、逃亡たりと覺ゆるぞ。彼等を索て聚會給へ。一人なりともをらずといはゞ、そのものに疑ひ被らん。そこらのこゝろ得肝要也」と説諭されて衆人は、その識量に嘆服し、いと憑しく思ひけり。

○作者この段を創して、ひとり謾に賛して云、善悪応報果せるかな。彼龜篠は不孝にして且姪濫なる、加るに、臺六が不義残忍の甚しき、神は怒り、人は怒り。是の奸悪と貪婪と、夫となり婦となれり。この故に、家に嗣べき子なく、外に貧べきの友なし。彼等が大慾、貪て飽くことをしらざる故に、日として煩惱絶ることなし。竟にその悪縁を結ぶに及びて、亦許弔の心を苦しめ、己が謀る所還て人に謀られ、最後にこよなき辱を受けて、宮六等に屠戮せられたり。しかれ共な

ほ幸にして額藏あり。一人ン義に勇て、奸を鋤き、悪を拔り。

吁義なるかな額藏。汚吏の家に仕れども、清きこと泥中の蓮の如し。亦よくその主の非を補ふて、信乃が為に諷るに方あり。不仁の主を主として、雪中に棄殺せられし、母の為に怨を舒す、又一飯に露命を繋ぐ、己が為に恩なしとせず。今その讐を撃に及びて、亀篠が授たる、そが親匠作が遺刀をもつてし、人の僕たる道を盡して、敢縲綹の咎を辞せず。噫賢なるかな額藏。宜忠義の人とすべし。